

南郷住宅ヒアリング

制作：青山学院大学総合文化政策学部黒石研究室

指導教員：黒石いずみ

協力：南郷復興公営住宅

2018年5月4日実施

【お話しした内容】

Tさん

- ・3月11日がお誕生日で、89歳を迎えたその日に震災に遭って自宅を流されてしまった。千葉に住んでいる息子さんがその日のうちに気仙沼に来てくれた。
- ・気仙沼に残りたいという意味から震災後もずっと一人で気仙沼に住んでいる。しかしご家族はそれを心配しているので、冬の間だけは千葉に住んでいる。
- ・その理由として「住み慣れたこの町が好きだから」と教えてくれた。

Yさん

- ・以前気仙沼水産高校（現在の気仙沼向洋高校）の事務として勤務していたYさんは同じ気仙沼向洋高校の生徒と嬉しそうに話していた。当時のことを懐かしみ、途中で涙ぐむ様子もあった。
- ・南郷住宅には息子さんと二人で暮らしているがたまにストレスを感じたり、けんかをしたりしてしまうと話していた。
- ・お茶会にはほぼ参加していっぱいおしゃべりをするのでストレス発散にもなっている。
- ・震災から7年も経っているのにこうして訪れてくれてありがとうございますと言ってくださったのが印象的だった。

Tさん

- ・一緒に住むお姉さんのお世話をしている。
- ・特定の職を持っていなかったようだったので「昔は普通に家で家事をしていらっしやったのですか」と聞いたら「とんでもない。うちはそんなにお金に余裕がなかったから旦那の漁の手伝いをしていたよ。」と言われた。家での役割の認識が全く違うと感じた。
- ・お茶会で世間話をしたり、歌を歌ったりするのが楽しいと言っていた。

Tさん

- ・毎週火曜日のお茶会が楽しみだがそれ以外の楽しみを持っていない。
- ・当日は腰が痛かったが、私たち青学生が訪れるということで足を運んでくださった。
- ・お水が大好きなのでお茶会の時は1人だけジョッキに水を入れてもらっている。
- ・秋田に友達と旅行したという楽しかった思い出話をしてくださった。
- ・昔、娘さんがCMに出たことがあると嬉しそうに自慢してくださった一方、今はなかなか会いに来てくれないことを寂しそうにお話してくださった。

Tさん

- ・毎週あるお茶会を楽しみにしている。

- ・小説を読むことが好きで、2週間で5冊ほど読むこともある。
- ・仮説住宅に6年間住んでいた。

Sさん

- ・埼玉県出身で18歳の時に気仙沼へ引っ越してきた。
- ・洋裁学校に通っていて、洋服屋で働いていた。
- ・今は週1でリハビリに通っている。

Nさん

- ・震災で何もかも流され、直後に旦那さんを亡くしてしまい、避難所を転々とさせられたのちこの南郷住宅に住むことになった。
- ・付き合いの長かった近所の人たちがみんなバラバラになってしまっていて会えないことが寂しい
- ・歳を重ねれば重ねるほど新しく交友関係を作るのは気力がいると話していて、なるほどと思った。



【カード作り】

今回はお話してくださったお母さま方にプレゼントとして一人一枚写真付きのカードをその場で制作し、手渡しした。事前準備として色紙を人数分適当な大きさに切り、そのふちにマスキングテープで飾り付けた。写真の印刷の時間を省くためにチェキを用意して効率良く行うことができた。カードにはそれぞれの名前と、話した内容をもとにメッセージを書き込んだ。最初は写真撮影に恥ずかしそうだったけれど、慣れてくるとお友達同士や学生と撮影していた。お母さま方は気仙沼向洋高校の生徒と地元の話ができて楽しそうだった。

【まとめ・感想】

今回お母さま方とお話しして、震災の経験を話して下さったのが印象的でした。震災から7年が経って受け入れられるようになったことや、私たちに震災の体験を伝えたかったのではないかと思います。また居住者の方々が週一回のお茶会をととても楽しみにしていることが感じられました。震災によってかつてあったコミュニティを崩されてしまったお母さま方にとって、お茶会は新しくコミュニティを形成する大切な場でありました。一方で南郷住宅ではお隣同士の付き合いがない方もいるようで、住宅内でのコミュニティ形成はお茶会という週一回の定期イベントに限られていることも課題と感じました。

お茶会でお母様方にプレゼントしたカードは当日の思い出が形に残るのでとても喜んでもらえました。反省点としては最初に話していたお母さまがいたにもかかわらず、カード作りにあたってグループを組みなおしてしまったのでお話を聞いていないお母さまにカードを作ることになってしまいました。現在は一人の女性がお茶会を運営しており負担が大きくなってしまうので、コミュニティの維持のためにも人々の協力が必要なのではないかと思いました。